

観光戦略会の研究経緯

観光戦略研究会

研究員 大 澤 健

(和歌山大学経済学部助教授)

近年「観光業」は非常に注目を集める産業である。日本人のライフスタイルが余暇重視型に転換しているかどうかは即断しかねるが、経済構造の「脱工業化」「サービス化」「ソフト化」への転換にともなって今後発展する産業分野だと考えられている。

しかしながら、そうであればこそ「観光戦略」というものが「期待」と「希求」の現れになることが多いのも事実である。特に従来産業が衰退傾向にあり、広範な人口減少地域を抱える和歌山県にあって、観光は今後期待される重要な戦略的産業分野である。それゆえ、「観光立県」という自称には、実態に応じた自負というよりも、観光を新しい産業形成の柱に据えなければならないという切迫した期待と希求が込められていると言える。

そういう一般的な期待にも関わらず和歌山県内の観光地は苦戦している状況にある。代表的な観光地である白浜、那智勝浦においても、また観光を新たに地域振興の切り札にしたいと考えている地域においてもこの傾向は共有されている。

和歌山県の観光地の全般的な苦境の原因は様々に考えることができるだろう。景気が悪いという漠然とした原因を別にすれば、よく言われるのは、「アクセス」「目玉施設」「PR」などに問題があるということである。逆に、これをキチンとすれば観光地としての発展、再発展が可能になると期待されがちである。しかし、問題はこのような点にあるのではない。というのも、近年着実に来客数をのばしている観光地は、このような条件に恵まれたところとは全く一致していないからである。

また、観光客のニーズの変化とそれに対応できていないことも原因にあげられる。大きな変化は団体客の急激な減

少と旅行の「個」化であり、団体向けの施設を整備し、団体向けの誘客の仕方をしてきた代表的な観光地は苦戦を強いられることになっている。さらに、豊になることで旅慣れ、レジャー慣れしてきた日本人はより満足度の高く、より印象深い旅行を求めるようになってきているといわれ、「参加」「体験」「いやし」といった言葉が観光業のキーワードになってきている。

ただし、このような変化に目を奪われて、単に個人客に対応するために施設の改造をしたり、集客手法を変えたりすることだけが観光地に求められているのではない。観光業をめぐる本当の変化は、このような観光客の旅行形態やニーズの変化に対応して、「観光地としての在り方」に変化が迫られている点にある。

従来の観光業は「施設型」である場合が多く、団体客を効率的に捌くことが観光業の収益性に直結するという発想に立ってきた。目玉施設で人を惹きつけ、大量の客を動かすという、いわば供給者の都合にあわせた観光が提供されてきたと言える。しかし、「体験」や「いやし」という言葉に表現されるものは、観光客の深い部分での変化である。単なる日常生活からの脱却や憂さ晴らしではなく、地域の「本物」の景観や自然、食べ物や生活文化に触れたいという要求を表現するものだと考えられる。このようなニーズに応えるためには、施設や誘客手法よりももっと根本的な変化が必要となる。

近年の観光業をめぐる変化は従来の観光地の考え方や在り方に根本的な変更を迫るものであると言える。つまり、観光地に求められるものは、景観や居心地の良さ、地域の本当の味や産物、さらには地域全体としてのホスピタリティである。こうした魅力を生み出すためには、「観光地」という地域全体の魅力をいかに維持し、発展させるかという「地域の総合戦略」とともに、地域の資源をいかにしてマネジメントしていくかという「地域の経営戦略」が必要とされる。県内観光地はこの点で大きく遅れをとっており、このため極めて難しい課題を突きつけられている。

本年の研究においては、和歌山県の観光地の全体的な苦境の原因がこのような地域戦略なり地域経営の発想が欠落している点に求められることを明らかにした。アクセスや

施設は副次的な問題に過ぎない。次年度以降、個別的で対処療法的な観光戦略ではなく、地域づくりや人づくりを通じた観光戦略をいかに構築していくのかを探っていくこととする。